

J.S.

バッハのオルガン観——ミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」をめぐって——

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 椎名, 雄一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000004

J.S. バッハのオルガン観

——ミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」 をめぐって——

椎 名 雄一郎

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) は、オルガニスト、オルガン鑑定家として高い評価を受け、各地のオルガン検査に招かれた。オルガン鑑定家として、バッハ自身による報告書、またヨハン・クーナウ Johann Kuhnau (1660-1722) 等代表者がバッハの意見とともに記した検査報告書が伝えられている。バッハのオルガン検査は高い評価を得ていたとされるが、オルガン建造上、どの程度まで踏み込んだ検査をしたのか疑問が残る。例えば 1746 年に完成したツァハリアス・ヒルデブランド Zacharias Hildebrandt (1688-1757) 建造のナウムブルク・聖ヴェンツェル教会のオルガンは、バッハとオルガン建造家でヒルデブランドの師であるゴットフリート・ジルバーマン Gottfried Silbermann (1683-1753) によりオルガン検査が行われ、検査によると高い評価が与えられた。しかし検査後、同教会オルガニストより様々な不具合が報告されている¹。

バッハの生涯において、オルガン建造を学んだ記録はほとんどない。バッハはどのようにオルガン建造に関する知識を得たのだろうか。1708 年に記されたミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」は若きバッハのオルガンの理想を知ることができる貴重な資料である。その理想はどのように育まれたのだろうか。この改修計画書に記されている内容は、1681 年に初版が出版されたアンドレアス・ヴェルクマイスター Andreas Werckmeister (1645-1706) の『拡張され改良されたオルガン検査』*Erweiterte und verbesserte Orgelprobe*² のディスポジション例、アイゼナハ・聖ゲオルゲン教会オルガン改修計画の大オルガン・ディスポジションと大きな共通点を見出すことができる。本論はこの 2 つの楽器・改修計画とミュールハウゼン・聖ブラジューウス教会の「オルガン改修計画書」を比較し、バッハのオルガンに対する知見がどのように形成されたのかを論じる。

1 Bach-Dokumente II, pp. 429-31, 聖ヴェンツェル教会オルガニストのヨハン・クリスティアン・クルーゲによるオルガン検査への苦情とジルバーマンの回答が残されている。

2 Werckmeister, Andreas. *Erweiterte und Verbesserte Orgel-Probe*. Quedlinburg: Theodor Phillip Calvisius, 1698. Facsimile, Kassel & Basel: Bärenreiter, 1970

1. ヴェルクマイスター『拡張され改良されたオルガン検査』のディスポジション例

アンドレアス・ヴェルクマイスター Andreas Werckmeister (1645-1706) は作曲家、音楽理論家として中部ドイツで活躍した。特に鍵盤調律法の分野では、彼の考案した調律法は現在でも使用されている。1681年オルガン検査の方法について記した『拡張され改良されたオルガン検査』初版が出版され、その後も改訂版が出版されている。この書はアイゼナハのヨハン・クリストフ・バッハ Johann Christoph Bach (1642-1703)、ヨハン・ゼバスティアン・バッハに影響を与え、ライプツィヒ・トーマス教会カントルを務めたJ. クーナウも読み、オルガン検査に臨んだようである³。

17世紀末から18世紀前半のオルガン建造を知る上で、『拡張され改良されたオルガン検査』は貴重な資料である。この時代、中部ドイツではオルガンに求める音色が大きく変化した。彼はこの新しい変化を著書で紹介し、オルガン建造に大きく貢献した。ヴェルクマイスターはどのように新造、または改修されたオルガンの検査を行えばよいのか、具体的にはオルガンの設置場所、ふいご、風箱、パイプ、鍵盤の重さなどについて、どのように考えるか32章にわたり、ユーモアを交えて記している。ここでは第21章に提案されている大オルガンのディスポジション例から、当時考えられた新しいオルガンとはどのようなオルガンだったのか考察する。

1-1 ヴェルクマイスターのディスポジション

「オルガン建造また契約の際に役に立つかもしれないいくつかの事項」として、第21章以下が記されている。第21章はどのようにオルガン建造家を選定し、ディスポジションを決定するか、簡単に述べた後、実際にディスポジションのプランを提示している。50ストップ3段手鍵盤の楽器が表として提示され、さらにオプションとして4段目の手鍵盤を設けるならばと説明を加えている(資料2の左欄参照、第4段目の手鍵盤についてはヴェルクマイスターの表には書かれていないため、()書きとした)⁴。

オプションの第4段目手鍵盤パイプは本体の後ろ側に置くとよいとし、その場所に別ケースでパイプを配置することにより、「遠くから聴こえてくるかのようで、非常に心地

3 P. Williamsによると、バッハ、クーナウのオルガン検査はヴェルクマイスターの記している内容と共通点が多いことを明らかにしている。詳細は Williams, Peter. "J.S. Bach Orgelsachverständiger unter dem Einfluß Werckmeisters?" In *Bach-Jahrbuch*: EVANGELISCHE VERLAGSANSTALT, 1982, pp. 131-142

4 Werckmeister, Andreas., p. 50

よい」としている。さらに別鍵盤では複雑になる場合、Brustwerk⁵または Rück=positiv にこれらのストップを配置する可能性を付け加えている。

その他3段手鍵盤と足鍵盤を持つ楽器では2つの Tremulant (速いものと遅いもの)、Zimbelstern, Pauke (ティンパニ) も必要かもしれないと続けている。

ふいごは、この規模の楽器では10フィート×6フィートのふいごを5-7つ必要とし、3-4つのふいごが手鍵盤用、2-3つのふいごが足鍵盤用とする。これは手鍵盤と足鍵盤を別のふいごにすることで、足鍵盤で低音パイプが大量の風を消費しても、オルガン全体の風が不安定にならないようにしている。

大きなパイプについて、Oberwerk の Principal 16' は必ずしも必要はなく、8' の Principal でも良く、その場合 Quinta 6' も必要ない (16' ベースのストップのため)。そして Rück=positiv の Principal 8' は Gedackt 8' と交換されるかもしれないと述べている。また Oberwerk に Principal 16' がある場合、足鍵盤に Principal 32' が必要と考えるかもしれないが、耳に心地よく響くことが、ほとんどないにもかかわらず高価なため、勧められないとする。Principal 16' よりも Gedackt 16' の方が手鍵盤でより多くの働きをし、足鍵盤では Gedackt 32' は Principal 32' よりも優れていてコストもかからない。そればかりか安価で迅速に音を出すことができ、さらに木でできていると述べる。手鍵盤の16' に関してはコストを考えるとともに、手鍵盤に足鍵盤よりも大きなストップを割り当てないように注意することが書き添えられている。倍音管は基本仕様が4ストップ以上のオルガンでは、Quinta 3' を配置し、さらに Tierce (Terz または Tertian) もあるとよいとする。

1-2 各鍵盤のストップ配置

1-2-1 Oberwerk

主鍵盤を担い全14ストップからなる。16', 8' の基音ストップが8ストップと半分以上を占める。フルート族は Quintiten 16', Spitzflöit 8', Gedackt 8' の3つ、ストリング族は Violdigamba 8' のみである。フルート族は全14ストップの内、16', 8' のみの配置で合計3ストップは少ない。反対に8ストップがプリンシパル族であることから、ヴェルクマイスターがこの鍵盤にシャープで輝かしい音色を求めており、まだ前時代のオルガンの考えから完全には抜け出していない印象を受ける。

5度管 Quinta 3', 3度管 Tertia 1 3/5' を別ストップとして配置していることも、特徴として挙げられる。この2ストップは Sesquialtera として1ストップでまとめることもできるが、別ストップとしているのは、Quinta 3' を他のプリンシパル族とともに、Organo pleno を構

5 以下、鍵盤名、ストップ名はヴェルクマイスターの使用している綴りをそのまま使用する。

成することを考えている。

16' についてフルー管に関する記述はあるが、リード管の Fagott 16' については何も述べられていない。Trompet 8' だけでなく、Fagott 16' が配置することにより「荘重さ」Gravität⁶を引き出すことを求めていることは明らかである。

1-2-2 Rück=positiv

Rück=positiv はオルガン音楽の中で、響きの対比をつけるための重要な要素だが、17世紀末からの音楽趣味の変化とともに、設置されなくなっていく。ヴェルクマイスターも「近年は人気がない Rück=positiv」と述べている⁷。

Rück=positiv には全 12 ストップが配置され、様々な試みがみられる。8' は Principal とフルート族 Qvintiten の 2 ストップであることは興味深い。なぜなら Qvintiten 8' は他のフルート族のパイプと異なり、ストリング族に近い倍音豊かな音色を持っているため、普通のフルート族と同様には扱うことができないからである。ヴェルクマイスターは紙面上でストップ構成を考えているため、何の制約もなかったはずである。なぜもう 1 ストップ、Gedackt 8' などを追加しなかったのか疑問である。倍音の豊かな特徴的な 8' を求めているのだろうか。

一方 4' はプリンシパル族の Octava の他、Nacht=horn (開管)、Spitzflöit の 2 つのフルート族が配置されている。スケールの異なるフルート族のパイプであり、より多様な音色を求めて 2 つのフルート族を配置したのだろうか。確かにレジストレーションにおいては、4' は音色決定に大きな役割を果たすパイプである。他鍵盤でもスケールの異なる 2 つのフルート族を 4 フィートに置いていることから、彼のオルガンの理想の一つだったのだろう。

3' はプリンシパル族の Qvinta、閉管のフルート族の Gedackte Qvinta の 2 つが同じ鍵盤に配置されている。つまり Qvinta は Tertia 1 3/4' とともに、Sesquialtera を構成し、一方の Gedackte Qvinta は音に柔らかみを与えることを念頭に置いている。Fagott 8', Schallmey 4' の 2 つのリード管は、独奏声部を演奏するストップとして有効である。

1-2-3 Brustwerk

Rück=positiv, Pedal と同数である全 12 ストップの Brustwerk は、充実したストップ構成である。Brustwerk は演奏台のすぐ上の部分に配置されている。そのためスペース上、大きなパイプを収納することは難しく、アイゼナハでは全 6 ストップとヴェルクマイスターの提示したものの半分である。ヴェルクマイスターのストップ構成は、8' が 2, 4' が

6 Gravität は後期バロック時代のオルガンを音色を表す言葉で、ヨハン・クリストフ・バッハ、ヨハン・ゼバスティアン・バッハも使用しており、当時の共通認識として浸透していた。

7 Werckmeister, Andreas., p. 50

3, 2' が 2 と複数の同じフィート数のストップが置かれている。特に 4' はプリンシパル族 Principal, フルート族で閉管の Klein Gedackt, 倍音豊かな音色を持つ Quinta thon と多様な音色を揃えている。Rück=positiv でも観察した通り, ヴェルクマイスターのディスポジションの特徴として 4' のストップを 3 つ設定していることが挙げられる。8' パイプは長さが必要で, コスト上, またスペースの上でも多くのストップを配置できないため, 4' パイプでオルガンに様々なキャラクターを持たせようとしていることは明らかである。

また Mixtur 3fach の他 Feldflöte 1', Sesquialtera が構成できるよう Quinta 3', Tertia 1 3/4' が配置されている。リード管は Brustwerk の典型的なリード管である Regal が Lieblich Regal 8' として置かれている。Lieblich (愛らしい) とつけられたこの Regal は優しい音で鳴ることを理想としたのだろう。

1-2-4 Pedal

全 12 ストップの足鍵盤は閉管の 32' を持ち, 「荘重さ」が特徴として挙げられる。

16' は Principal, Subbass, 8' は Octava, Gedackt とそれぞれプリンシパル族, フルート族を備えている。4' はプリンシパル族の Super Octava のみだが, この構成は一般的である。その他 Kleine Octava 2', Wald flöte Baß 1' と Pedal にフルー管の高いピッチは一般的ではないが, 大規模なオルガンでは備え付けられる。Mixtur 4fach は一般的な配置である。

リード管は Posaun 16', Trompet 8', Cornet 2' で, 4' のリード管がない。4' のリード管はアイゼナハ, 後述するミュールハウゼンのオルガンにも存在せず, 当時としては一般的だったと考えられる。

2. アイゼナハ・聖ゲオルゲン教会

2-1 ヨハン・クリストフ・バッハによる新しいオルガン

バッハの従伯父ヨハン・クリストフ・バッハは, 1665 年から亡くなるまで, ヨハン・ゼバスティアン・バッハが洗礼を受けた聖ゲオルゲン教会のオルガニストを務めた。ヨハン・クリストフは聖ゲオルゲン教会のオルガン改修を計画し, その改修は 1696-1707 年の長期間にわたった (ヨハン・クリストフは 1703 年に亡くなっている)。彼はこの改修により, アイゼナハのオルガンが近隣の町にはない特別なオルガンになると明言している⁸。改修計画は当初の契約から次々と変更されたことが, リン・エドワーズ・バトラー Lynn

8 Böhme, Ulrich. "Die Bach-Orgel. Leipzig" In *Die Orgeln der Thomaskirche zu Leipzig*: EVANGELISCHE VERLAGSANSTALT, 2005, p. 54

Edwards Butler の研究により明らかとなっている⁹。

改修はオールドルーフ出身のオルガン建造家ゲオルク・クリストフ・シュテルツィング Georg Christoph Stertzing (1659-1717) が担当した。彼はクリストフ・クノット Christoph Knott の後を継ぎ、アイゼナハの3教会（聖ゲオルゲン、聖ニコライ、聖アンナ）のオルガンを良い状態で保つ役割が与えられ、聖ゲオルゲン教会オルガニストであったヨハン・クリストフと仕事上、近い関係であったことは次の記録からも明らかである¹⁰。

聖ゲオルゲン教会のオルガン作業は、祝祭日ごとに、その他必要な場合は6週間ごとに、特にリード管に目を通し、調律しなければならない。さらに、聖ゲオルゲン教会のオルガンが使用されているときは、必ず立ち会うことを義務づけられ、損傷があればすぐに修理できるようにする。その見返りとして、毎年10ルピーが保証されている。

当時、聖ゲオルゲン教会のオルガン状態は悪く、彼らはオルガンを前にして、日頃より様々な議論を交わしたのだろう。そして1696年3月19日に新しいオルガンに関する合意がまとまった。それはこれまでの約2倍の大きさを持つ楽器とし、ヨハン・クリストフの理想が色濃く反映されている。しかし同年6月26日、ヨハン・クリストフは最初のオルガン仕様変更を表明している。彼は古いパイプと新しいパイプの金属量を計算しながら、彼が考えた新しい仕様を提案する。ヴェルクマイスター著『拡張され改良されたオルガン検査』でも金属量と価格について言及されており、当時のオルガン建造では重要なことだった。バトラーによると、さらに同年11月30日、12月30日の日付による改良メモが残されている。ヨハン・クリストフはシュテルツィングと何度も議論し、仕様を変更していったのだろう。

ヨハン・ゼバスティアンは1695年に父を亡くしアイゼナハからオールドルーフの長兄ヨハン・クリストフの元に引きとられた。同じバッハ一族であるヨハン・ゼバスティアンと従伯父ヨハン・クリストフは、アイゼナハで接点があったはずである。ヨハン・クリストフはバッハ一族の中で高い評価を得ており、ヨハン・ゼバスティアンは彼を「深遠な作曲家」profonden Componisten と評し、ライブツィヒ時代には彼のモテットを演奏した。

9 Butler, Lynn Edwards. "Johann Christoph Bach und die von Georg Christoph Stertzing erbaute große Orgel der Georgenkirche in Eisenach." In *Bach-Jahrbuch*: EVANGELISCHE VERLAGSANSTALT, 2008, pp. 229-269

10 Förderkreis Stertzingorgel in Bübleben e.V.
<http://www.stertzingorgel.de/html/stertzing.html> 閲覧日 2023年2月20日

またヨハン・ゼバスティアンの息子カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ Carl Philipp Emanuel Bach (1714-88) は「偉大で表現豊かな作曲家」と評している¹¹。ヨハン・ゼバスティアンはオールドルーフに移ってから、アイゼナハのオルガンについて、子どもながらに聞いていたことは容易に推測できる。

オルガン建造は、オルガン使用方法により、各地域で楽器様式の法則が見られ、その様式によりほとんどの楽器は建造される。しかしヨハン・クリストフのオルガン仕様は、当時中部ドイツの仕様とは大きく異なっている。つまり 17 世紀末の中部ドイツにおいて、ヨハン・クリストフは新しいオルガン仕様を提案している。この章ではヨハン・クリストフの求めた新しいオルガン像を考察する。アイゼナハ・聖ゲオルゲン教会のオルガン仕様については資料 2 の中欄のとおりである。

2-2 各部の特徴

2-2-1 鍵盤

26 ストップから最終的に 58 ストップへの改修は、ほとんど新しい楽器建造とってよいだろう。当時一般的な Rückpositiv を廃止したことは大きな決断だったと考えられる。これまでのオルガン建造とは異なる、新しいオルガンを求めた結果である。同時期の 1689-1695 年、北ドイツのオルガン建造家アルプ・シュニットガー Arp Schnitger (1648-1719) が中部ドイツ・マクデブルグの聖ヨハニス教会に 3 段手鍵盤と足鍵盤、Posaune^{32'} を含む 62 ストップの楽器を建造した。この楽器にはシュニットガーの楽器の多くに見られる Rückpositiv がない。シュニットガーも中部ドイツの新しいオルガン建造の動きを考慮して、Rückpositiv を設定しなかったのではないだろうか。シュテルツィングはアイゼナハのオルガン改修中の 1701 年、この楽器を訪問した記録がある。アイゼナハの楽器は、シュテルツィングにとっても冒険的な新しいオルガン建造であり、話題となった Rückpositiv なしのシュニットガーの楽器に、興味を持った可能性が高い。Rückpositiv は教会内の音響効果を使用した鍵盤で、演奏者の背中側にパイプが配置され、もっとも会衆席に近いところでパイプが鳴る。コラール旋律を華やかに演奏したい場合などに使用され、北ドイツのコラール幻想曲などで大活躍する鍵盤である一方、他のパイプ群とは離れた位置に Rückpositiv のパイプ群が置かれるため、他のパイプ群と音の調和がとりにくい難点がある。当時の新しいオルガン観ではこの点が問題となったのだろう。

アイゼナハの楽器の鍵盤配置は、下から順番に Brustwerck¹², Ober Seiten-Werck, Ober-

11 Böhme, Ulrich., p. 54

12 鍵盤, ストップ名の綴りは, 1698 年 1 月 21 日付けのシュテルツィングによるディスポジション

werck, Unter Seiten-Werck で、主鍵盤は Oberwerck である。またカブラーは Oberwerck と Pedal の足鍵盤カブラーと Ober Seiten-Werck と Oberwerck の手鍵盤カブラーのみである。

鍵盤音域からも新しい時代の動きがみられる。手鍵盤、足鍵盤とも当時の一般的な楽器と比較すると、音域が広がっている。これまでの中部ドイツのオルガン、そしてオルガン音楽は、北ドイツと比較すると足鍵盤は補助的なもので（一部パッヘルベルのように足鍵盤のソロもあるが）、その音域も C,D-c¹ または d¹ のものがほとんどである。18 世紀のオルガン建造家 G. ジルバーマンの足鍵盤最高音は c¹ である。ヨハン・ゼバスティアンがオルガニストの職に就いた初めの 2 つの教会（アルンシュタット・新教会、ミュールハウゼン・聖ブラジューズ教会）の最高音は d¹ だった。また足鍵盤を多用する北ドイツの楽器でも最高音は d¹ である。アイゼナハの最高音 e¹ は特別に高く、足鍵盤に幅広い音域を設定している（手鍵盤の最高音 e³ も同様）。

そして手鍵盤、足鍵盤の最低音 C の隣の Cis 音が製作されていることも異例である。ショートオクターヴ鍵盤も珍しくなかった時代である。ヴェルクマイスターは、ショートオクターヴは弾きにくいので、最低音のオクターヴの鍵盤配置も他のオクターヴと同じにすべきとしているが、Cis 音の必要性を述べていない¹³。鍵盤音域が拡張されていった時代の流れの中で、ヨハン・クリストフは、すべての低音パイプを計画したのである。

2-2-2 基音ストップの充実

16', 8' の基音ストップの配置が、当時の中部ドイツ、他地域と比較すると多く配置されている。Oberwerck（全 13 ストップ）に 5, Ober Seiten-Werck（全 13 ストップ）に 5, Unter Seiten-Werck（全 13 ストップ）に 4, Brustwerck（全 6 ストップ）に 1, Pedal（全 13 ストップ）に 8（32' も含む）である。アイゼナハの楽器は北ドイツのハンブルク・聖ヤコビ教会のシュニットガー建造の楽器と同規模で、基音ストップが充実していることも類似している。しかし一方はハンザ同盟の代表的都市であり、アイゼナハは宮廷があり、敬虔なルター派の信者が多い町のオルガンとしても、町の規模からは普通ではない。一般的に基音ストップは長いパイプが必要で、スペース、材料費等コストの上でも、必要以上に配置しない方が合理的である。特にクリストフ・バッハとシュテルツィングのやり取りで、どのように金属を有効に使用していくか、熟慮をしている点から、経済的に無理をしても、基音ストップを配置したかったと考えられる。

またストリング族、倍音豊かな基音ストップが、Oberwerck の Violdigamba 8', Ober

記述による。Böhme, Ulrich., pp. 56-61

13 Werckmeister, Andreas., p. 56

Seiten-Werck の Quintathön 16'¹⁴, Gemshorn 8', Unter Seiten-Werck の Quintathön 8', Pedal の Violon 16' と, Brustwerck 以外のすべての鍵盤に配置され, 弦楽器的な音色を目指す方向性が見られる。

2-2-3 低音ストップへのこだわり

手鍵盤では Brustwerck 以外に 16' のフルー管が 1 つずつ配置されている。この配置は異例である。ハンブルク・聖ヤコビ教会のオルガンと比較すると, 聖ヤコビ教会のオルガンの 16' は手鍵盤では Hauptwerk の Principal, Quintadehn の 2 ストップのみである。Pedal の 16' のフルー管を比較すると聖ゲオルゲン教会のオルガンが Principal, Violon, Subbaß の 3 つ, 聖ヤコビ教会は Octava, Subbas の 2 つである。聖ゲオルゲン教会のオルガンの Violon 16' は特徴的なストップである。Violon はストリング族のパイプで弦楽器風に鳴る。明らかに弦楽アンサンブルの音色を模倣しているのではないだろう。

また Großer Untersatz 32' を設置していることも言及せねばならない。聖ゲオルゲン教会のオルガン設置以降, 中部ドイツではいくつかの中型オルガンには不似合いな 32' が配置されている。32' は 16' の 1 オクターヴ下の音高のストップで, 通常はなくても困らないストップである。しかしヨハン・クリストフ, ヨハン・ゼバスティアンなど, 中部ドイツのこの時代のオルガニストは 32' を求めたのである。これは「荘重さ」の音色を求めている時代の流れである。さらに計画されていた Oberwerck の Fagott16' も同様の考えによると思われる。

2-2-4 倍音管 (3' と Sesquialtera)

倍音管の配置も特徴的である。Sesquialtera が Oberwerck と Ober Seiten-Werck の 2 つの鍵盤で, どちらも 3 列の Sesquialtera として見られる¹⁵。現代のオルガンでは Sesquialtera は 2 列であるが, Sesquialtera は 4' と共に常に使用することから, アイゼナハでは 3 列にしている¹⁶。この 2 つの鍵盤には, さらにフルート族の 3' ストップ (Oberwerck に Nassat, Ober Seiten-Werck に Hohflöt) が配置されていることは注目される。通常 Sesquialtera は 3' の音高を含んで鳴るため, 別ストップの 3' を配置することは異例である。3' のこだわりは Unter Seiten-Werck にも Spitzquint 3' が配置されていることから感じられる。18 世紀になると G. ジルバーマンがフランスのオルガン建造法をこの地域に取り入れるが, この時期は, まだ倍音を効果的に配置したフランスのオルガンは, 知られていない。特に 3',

14 フルード族に分類されるが, 倍音豊かなパイプで特殊な音色である。

15 Adlung は Brustwerck の Quint 1½' + Sexta ¾' も Sesquialtera II と表記している。5 度管と 3 度管の組み合わせは Sesquialtera と考えてよいのではないだろうか。Adlung, Jacob. *Musica mechanica organoedi Band I*, Berlin: Friedrich Wilhelm Birnstiel, 1768, p. 214

16 Butler, Lynn Edwards., p. 237

つまり5度管へのこだわりが感じられる。そしてこの好みはヨハン・ゼバスティアンへも受け継がれている。

3. ミュールハウゼン「オルガン改修計画書」

3-1 ミュールハウゼンのオルガン

ヨハン・ゼバスティアン・バッハはどのような理想のオルガンを思い描いていたのだろうか。オルガン検査報告書、断片的な発言が息子、弟子らによって伝えられているが、若きヨハン・ゼバスティアンのオルガンに関する知見が最も現れている文書は、ミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」（資料1）だろう。1707年7月ヨハン・ゼバスティアンはミュールハウゼン・聖ブラジュース教会オルガニストに採用され、翌年1708年2月に「オルガン改修計画書」を提出している。「オルガン改修計画書」は聖ブラジュース教会のオルガンに問題があり、改良のために作成されたものである。

オルガンは1560-63年ヨスト・パーベ Jost Pape により建造され、1676年ヨスト・シェーファー Jost Schäfer により改修、1687-91年ヨハン・フリードリヒ・ヴェンダー Johann Friedrich Wender (1650-1729) が改造し、Oberwerk と Rückpositiv の2段の手鍵盤と足鍵盤の29ストップの楽器とした。ヨハン・ゼバスティアンはこの楽器を3段手鍵盤と足鍵盤の37ストップの楽器への拡張を計画し、改修はヴェンダーがおこなった。

この改修計画を大きく分類すると、ふいご(1, 2)、低音部のペダル(2~5)、グロッケンシュピール(6)、Oberwerk(7~9)、Brustwerk(10)、そしてカプラー等(11.)となる。以上の点についてヨハン・ゼバスティアンがどのようにオルガンを改修しようと考えたのか、その意図を考察する。

3-2 各部の特徴

3-2-1 ふいご

計画書冒頭は「ふいご」について記している。第一に風の重要性を考えていたことが理解できる。風が不足していることは改修以前から問題になっていた。少なくとも Brustwerk の追加、基音ストップ増加により、風が不足することは確実であった。そのために新しいふいごの設置を提案している。ヨハン・ゼバスティアンの案では3段の手鍵盤のために3つ、足鍵盤のために4つのふいごが必要としているが、ヴェンダーの改修したオルガンには手鍵盤用に4つ、足鍵盤用に2つのふいごが設置された。実際には鳴らしてみたら合計6つのふいごで風量が足りたということなのだろうか。

3-2-2 低音部のペダル

改修計画で、ヨハン・ゼバスティアンは低音部について風、パイプ等の改良を4の項目にわたって提案している。風の問題が起りやすいのは、大量の風を消費する低音部のパイプである。彼は十分な風量が確保できるように、古い4つのふいごを風圧を上げて低音部（足鍵盤）用ふいごとして使用することを提案している。足鍵盤について、ふいごを増設した上で、さらに風不足の原因を探っている。そして風導管のサイズが問題だったのではと見立てている。そのため風箱をオルガン本体から一度取り外して、新しい風導管を用意した上で、風箱を再設置するように提案する。

Unttersatz 32¹⁷のために専用の風箱の設置を求めている。ヨハン・クリストフも聖ゲオルゲン教会のオルガンで足鍵盤の Untersatz 32' と Octav 16' のために風箱を分けてと記しているが、同様のことを述べていることは興味深い。

5. の Posaunen Bass 16' に関する提案は「荘重さ」を引き出すためとしている。大きなポディ corporibus とはおそらく共鳴管のことで、シャロットは原文では Mundstücke である。Mundstücke は現代では管楽器のマウスピースを指すが、当時 M. プレトリウスなどの文献でもシャロットを Mundstücke と呼んでいる。シャロットを具体的にどのように調整するのかについてはこの文章から伺い知ることはできないが、いずれにしても基音が豊かな音を Posaunen Bass に求めたことは明らかである。

Unttersatz 32', Posaune 16' の2ストップについてヨハン・ゼバスティアンは「荘重さ」のためと明言している。当時の中部ドイツのオルガンに求められた音色は、輝かしく華やかでシャープな音色ではなく、暗く荘重な音色であったことが、ヴェルクマイスターなどの著書からも明らかである。ヨハン・ゼバスティアンは「荘重さ」という言葉を2回使用して、強調している。

3-2-3 グロッケンシュピール Glockenspiel

グロッケンシュピールについては教区の人々が望んでいるとし、教区民が用意する計画となっていた。しかしこの楽器に最終的に付けられていない。教区民で費用が出せなかったのかどうかは不明である。興味深いことにこのグロッケンシュピールは、アイゼナハ・聖ゲオルゲン教会のオルガンの足鍵盤にも付けられている。ヨハン・クリストフもグロッケンシュピールについて言及しており、ヨハン・ゼバスティアンもグロッケンシュピールを付けることについて、反対ではないようである。アイゼナハのグロッケンシュピールとミュールハウゼンの計画で異なる点は、アイゼナハが2'音高の鐘だったのに対し、ミュー

17 Adlung の表記に沿っている。ヨハン・ゼバスティアンの計画書と綴りの異なるストップ名もある。
Adlung, Jacob. Bd. I, p. 260

ルハウゼンは4'の音高である点である。

3-2-4 Oberwerk

改修前 (1707)	改修後 (1708)
Quintatön 16'	Quintatön 16'
Principal 8'	Principal 8'
<i>Gemßhorn 8'</i>	<i>Violdigamba 8'</i>
Oktave 4'	Oktave 4'
Gedackt 4'	Gedackt 4'
Quinte 3'	Quinte 3' (<i>Nasaat 3'</i> を提案)
Sesquialtera II	Sesquialtera II
Oktave 2'	Oktave 2'
Mixtur IV	Mixtur IV
Cymbel II	Cymbel II
<i>Trompette 8'</i>	<i>Fagotto 16'</i>

改修前と改修後の Oberwerk では上記の斜体部分が変化している¹⁸。最も大きな変更は Trompette 8' から Fagotto 16' だろう。ヨハン・ゼバスティアンは、Fagotto 16' を Music の中で非常にデリケートに響くとしている。ここでいう Music とは合奏音楽のことである。Fagotto 16' は、Trompette 8' よりも細い管であることは確かであるが、一般的には大きな音で鳴る印象がある。ヨハン・ゼバスティアンがここで指定している Fagotto 16' は音量的にも大きくなく、デリケートな音色を持ったストップである。この Fagotto 16' を使用した作品として〈神はわが砦〉Ein feste Burg ist unser Gott BWV720 が挙げられる。このコラール編曲は左手のパッセージに Fagotto 16' の指示があるが、現代のオルガンの Fagotto 16' ではバランスをうまくとることができない。ここでヨハン・ゼバスティアンの考える Fagotto 16' とは、1 オクターヴの違いはあるが、正に楽器のファゴットのような音色を持ったパイプなのだろう。一方撤去されることになった Trompette 8' は、中部ドイツのリード管が他の地域のものと比較して、それほど輝かしくは鳴らないとしても、ヨハン・ゼバスティアンにとってはそれほど魅力的ではなかったのだろうか。またはスペース上、Fagotto 16' か Trompette 8' の選択となったとき、Fagotto 16' を選択したのではないだろうか。いずれにせよ、ヨハン・ゼバスティアンが Fagotto 16' を選択したことは、この時代の音色、音楽の「荘重さ」への方向性が示されているのではないだろうか。

また Gemßhorn 8' から Violdigamba 8' への変更により、一般的に配置されるフルート族

18 以下、この項ではバッハの「オルガン改修計画書」で記されているストップ名を使用する。

の 8' がこの鍵盤にはなくなってしまう。スペース上の問題があったのだろうが、バッハはフルート族の Gemßhorn よりもストリング族の Violdigamba を選択した。新しい時代への流れで、オルガンに弦楽器的な音色を挿入する考えが反映されている。

ヨハン・ゼバスティアンはさらに Quinte 3' は、Nassat 3' に置き換えることも可能だと述べている。実際には Quinte 3' が維持された。これは Sesquialtera との関係が考えられる。Sesquialtera は一般的に Quinte 3', Terz 1 $\frac{3}{5}$ ' の混合管である。Terz 1 $\frac{3}{5}$ ' はヴェルクマイスターも述べているが必ず Quinte 3' とともに使用する。Sesquialtera の構成音としての役割としての Quinte 3' はすでに、Sesquialtera が配置されているため、ここでは他の鍵盤にもないフルート族で柔らかい音色である Nassat 3' を配置しようとする考えはよく理解できる。

3-2-5 Brustwerk

8', 4', 2' と Mixtur の構成は、一般的なディスポジションである。特筆すべきは Terz 1 $\frac{3}{5}$ ', Schallmey 8' の 2 ストップである。ヨハン・ゼバスティアンは、Terz 1 $\frac{3}{5}$ ' の説明で「いくつかの他のストップを加えることにより、完全に美しい Sesquialtera の響きを実現することができる」（資料 1 の 10.）と記している。Sesquialtera に通常必要な Quinte 3' はアードルングによると 1 $\frac{1}{2}$ ' と表記されており、最終的に Quinte 3' なのか、1 $\frac{1}{2}$ ' なのかは現在となつては不明である¹⁹。しかしいずれにせよ、3 度、5 度の倍音を含んだ音色が可能である。

Schallmey 8' は、アイゼナハ、ヴェルクマイスターにもみられない彼独自の考えであろう。一般的に Brustwerk の 8' リード管は、北ドイツのオルガンでもヴェルクマイスターの提案に書かれている Regal が一般的である。ヴェルクマイスターは、Rück=positiv 鍵盤に Schallmey 4' が配置されており、この影響がヨハン・クリストフにもみられる。アイゼナハのオルガンには Rück=positiv がないため、Brustwerk 鍵盤に当初 Schallmey 4' を配置しようと計画した（実際には導入されなかったが）。ヨハン・ゼバスティアンはヴェルクマイスター、ヨハン・クリストフの一連の流れから、4' ではなく、8' として Schallmey を導入したのではないだろうか。いずれにせよ Brustwerk 鍵盤に Schallmey 8' は異例である。

Stillgedackt 8' は「アンサンブルを完璧に伴奏するもので、良質の木材で製作するならば、金属製の Gedackt よりもはるかに良く響く」としている。ここでアンサンブルと訳している原語は Music で、通奏低音のためのストップとして考えていたことが理解できる。

3-2-6 カプラー等

手鍵盤のカプラーとして、計画書では Brustwerk と Oberwerk の手鍵盤のカプラーが必要としている。このカプラーは一般的なものであり、特筆すべきことではない。アードル

19 アードルングがなぜ 1 $\frac{1}{2}$ ' と表記したかは、4-1-2 で論じる。

ングによるディスポジション²⁰では、さらに Rückpositiv と Oberwerk のカプラーが記されている。当時のオルガンでは Rückpositiv と他の手鍵盤間のカプラーはほとんど見られない。一般的に Rückpositiv 鍵盤は、会衆席に一番近いので、ダイレクトな音で独奏声部などを演奏する際などに使用することが多い。そのため Rückpositiv を他の鍵盤とカプラーして使用することは、本来の Rückpositiv の特性を薄めてしまう。当時の中部ドイツで、より暗く、重く厚い音色、つまり「荘重さ」を出すために加えられたカプラーではないかと考えられる。

4. バッハのオルガン観の構築とその概観

ヴェルクマイスター著『拡張され改良されたオルガン検査』、ヨハン・クリストフ・バッハが関わったアイゼナハ・聖ゲオルゲン教会の改修、そしてバッハ自身が記したミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」について、その内容を考察してきた。この3つで記録されているディスポジションを比較すると、各鍵盤の位置づけとストップ配置、ストップ名称、音色の考え方など様々な点で共通点が現れる。ヴェルクマイスターは基本3段手鍵盤(4段目の手鍵盤オプションも記している)50ストップ、アイゼナハのオルガンは4段手鍵盤59ストップ、一方ミュールハウゼンの「改修計画書」は38ストップで、明らかにミュールハウゼンの聖ブラジューズ教会のオルガンは他の2つと比較すると規模が小さい。一方ストップ数が限られながらも、足鍵盤の Untersatz 32' 他、16', 8', 2' のリード管構成は他の大規模な楽器と同じである。本章では3つのディスポジションを比較し(資料2)、ヴェルクマイスターの著書、ヨハン・クリストフの改修計画が、ヨハン・ゼバスティアンが記したミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」にどのような影響を与えたかを観察し、若きバッハのオルガン観を考察する。なおオルガンのディスポジション設計は、ヴェルクマイスターの机上のディスポジションでは問題とならないが、実際には経済的、スペースなど様々な制約の中で作成されている。この点にも留意して比較・考察する。

4-1 各鍵盤の比較

4-1-1 主鍵盤 (Oberwerk, Ober- und Hauptwerk)

ヴェルクマイスターは14ストップ、アイゼナハは13ストップ、そしてミュールハウゼンは11ストップの規模である。各フィート数別に考察すると、16' はミュールハウゼンのオルガンは、アイゼナハと同様1ストップの配置で、ヴェルクマイスターも配置している

20 Adlung, Jacob. Bd. I, p. 260

Quintatön 16' (ヴェルクマイスターは Qvintiten で綴りは異なる) である。

8' に Principal の他, Violdigamba を配置していることは, 3 オルガンともに共通である。Violdigamba は 3 人とも同じ綴りでストップ名を示していることも興味深い。Violdigamba は様々な綴りが見られ, 3 人とも同じ綴りであることは, ヴェルクマイスターの著書の表示を参考にしたと考えられる。ヴェルクマイスターはさらにフルート族の Spitzflöit, アイゼナハも Rohrflöte が配置されているが, ミュールハウゼンには経済的またはスペースの余地がなかったのだろう。2 ストップのみである。通常, 8' にフルート族の基音のよく聴こえるパイプを配置しないと, 音を重ねていった場合にバランスをとることが難しい。8' でプリンシパル族と倍音の強いパイプとの組み合わせは, ヴェルクマイスターの Rück=positiv で Principal, Qvintiten の 2 ストップ配置されていることと重なる。Violdigamba, Qvintiten はパイプ製作方法, 整音にもよるが, 倍音の強い細いパイプである。この時代の一つの音色の特徴として挙げることができるだろうか。

Quinta 6' は, ヴェルクマイスター, アイゼナハのオルガンにあり, 16' ベースの倍音管である。それほどメジャーなストップではないが, ヴェルクマイスターの著書にヨハン・クリストフが影響を受けたのではないだろうか (綴りも同じである)。

Organo pleno を構成するプリンシパル族の基本構成は 3 つのオルガンとも同じである。ヴェルクマイスターは Principal 16' を配置しているが, これは彼自身がなくても良いとしており, ヨハン・クリストフもこれに従った可能性が高い。アイゼナハ, ミュールハウゼンのオルガンは 8', 4', 2', Mixtur, Cymbel と同じ構成で (開管か閉管か, また列数は異なるが, この部分は改修前のままである), 当時の一般的なディスプレイとされる。

興味深いのは Quinte 3' である。ミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」では, 「Quinte 3' 代わりに Nassat 3' を置くこともできるだろう」としている。バッハの Nassat 3' の提案はアイゼナハのディスプレイと驚くほど似通っている。Oberwerk の Nassat 3' はアイゼナハの楽器にも見られる。ミュールハウゼンの Oberwerk には Sesquialtera 2fach が配置されており Quinte 3' のパイプはすでにあるため, フルード族の柔らかい Nassat 3' を置くことは理にかなっている。一方, ヴェルクマイスターは Quinte 3' を置いている。これは前述したように Organo pleno の構成音としても使用でき, また Sesquialtera の構成音としても使用可能である。アイゼナハ, ミュールハウゼンには Sesquialtera が配置されており, 結果として Quinte 3' より柔らかいフルード族の 3' が良いと考えられたはずである。一方ヴェルクマイスターは Sesquialtera を置かず, 代わりに Tertia 1 3/8' を別ストップとして置き, 組み合わせて Sesquialtera の音色を構成できるようにしているのである。3 つのディスプレイの内, 最も年代的に早いヴェルクマイスターは Sesquialtera の構成

ストップを別ストップとして置き、その後のヨハン・クリストフ、ヨハン・ゼバスティアンは2ストップを Sesquialtera の1ストップにまとめ、代わりにフルート族の Nassat を置いたほうが、より多彩な音色が奏でられると考えたのだろう。そして、Nassat の綴りはアイゼナハ、ミュールハウゼンとも同じである。

リード管では、ヴェルクマイスターが Fagott 16', Trompet 8', アイゼナハが Trompete 8', ミュールハウゼンは Fagott 16' である。ヨハン・ゼバスティアンは Fagott 16' を「音楽（合奏）の中で非常にデリケートに響く」としている。ヨハン・クリストフ、ヨハン・ゼバスティアンとも本来はヴェルクマイスターと同様 Fagott 16', Trompete 8' の両ストップを入れることが理想であったが、様々な制約によりどちらかを選択したのではないだろうか。ヨハン・クリストフは Fagott 16' の導入を Trompete 8' とともに考えていたが、最終的に削られた経緯がシュテルツィングにより伝えられている²¹。二者択一でヨハン・ゼバスティアンが Fagott 16' を選択したことに、新しい時代への変化が表れている。この時代、オルガン音楽においてこれまでのオルガン独自の形式・語法から、他の器楽曲の要素が導入される過渡期であった。輝かしく華やかでオルガ的な Trompete 8' よりも、合奏としても使用でき、音楽に「荘重さ」を与える Fagott 16' を選択したのではないだろうか。

4-1-2 Brustwerk

ヴェルクマイスターは12ストップ、アイゼナハは6ストップ、そしてミュールハウゼンは8ストップである。ヴェルクマイスターと他の2オルガンのストップ数の差はオルガンの規模の差である。オルガンの規模を示す基準の一つに、プリンシパル・パイプの配置がある。ヴェルクマイスターのプリンシパル族の配置を見ると、Oberwerk の最低音のプリンシパル・ストップは16', Rück=positiv は8', Brustwerk は4' と各パイプ群の大きさにより設定されている。この考え方は当時ドイツのみならずフランスでも一般的だった。この「プリンシパル族の構成原理」から観察すると、アイゼナハ、ミュールハウゼンのオルガンは Oberwerk が8', アイゼナハの Ober Seiten-Werck, Unter Seiten-Werck, ミュールハウゼンの Rückpositiv が4', すると Brustwerk は2' のプリンシパルが、最も低いプリンシパルのパイプとして配置されるのである。そのためヴェルクマイスターと比較するとアイゼナハ、ミュールハウゼンの Brustwerk は必然的に小さい規模となるのである。

ヴェルクマイスターとミュールハウゼンでは Organo pleno が Brustwerk 鍵盤で可能である。アイゼナハには Mixtur が配置されていないが、Super Gemshörnlein 2'+ Quinta 1½' は Mixtur と同等とみなしてよいだろう。またアイゼナハは4段手鍵盤であるため、Brustwerk にそれほど多くのパイプを収納しなくても、他の手鍵盤に配置すればよかつたとも

21 Böhme, Ulrich., p. 57

考えられる。そのためアイゼナハの Brustwerk は小規模となっている。ヴェルクマイスターにありアイゼナハの Brustwerk にないストップの内、Qvinta thon 4', Tertia 1 3/8' 以外は Ober Seiten-Werck, Unter Seiten-Werck に含まれている。また Tertia 1 3/8' は Sexta 4/8' と同じ3度管であるため同等と考えることもできる。

アイゼナハ、ミュールハウゼンの 8', 4', 2' の構成は同じである。ミュールハウゼンにあってアイゼナハにないものとして Quinte, Mixtur, Schallmey 8' が挙げられる。ヨハン・ゼバスティアンが計画書に記している Quinte 3' は、「プリンシパル族の構成原理」から逸脱している。Brustwerk のプリンシパル族の最低フィート数は本来 2' でなければならないが、ヨハン・ゼバスティアンは 3' とするのである。実際に Quinte のフィート数が、ヨハン・ゼバスティアンが記した 3' だったのか、アードルングが記している 1 1/2' だったのかは不明である。3' とするとヴェルクマイスターと同じであり、1 1/2' であればアイゼナハの Quint 1 1/2' + Sexta 4/8' に含まれている。

Schallmey 8' はアイゼナハの楽器にはないが、ヨハン・クリストフは当初 4' の Schallmey を配置しようとしていた²²。Brustwerk に Schallmey 8' は見られないものであり、ヨハン・クリストフの 4' の計画とフィート数は異なるが、何らかの関係を表しているのではないだろうか (Brustwerk のリード管ではヴェルクマイスターの Regal, ヨハン・クリストフの Schallmey 4' はオルガン建造法上、通常の配置である)。

4-1-3 その他の手鍵盤

ヴェルクマイスターとミュールハウゼンには Rückpositiv (ヴェルクマイスター 12 ストップ, ミュールハウゼン 9 ストップ), さらにヴェルクマイスターはオプションとして 4.Clavier (4 段目の手鍵盤, 7 ストップ) を提案する。4.Clavier は 4 段目の手鍵盤としなくとも、ここに収められているストップを他の手鍵盤に挿入することも考えられると注釈をつけた上での設定である。一方アイゼナハの楽器は 4 段手鍵盤で Ober Seiten-Werck (13 ストップ), Unter Seiten-Werck (13 ストップ) が設定されている。

8' はヴェルクマイスターが、Principal, Qvintiten と前述した通り異例な構成である。ミュールハウゼンは、ヴェルクマイスターと綴りは異なるが Quintatön が配置されている。アイゼナハの Ober Seiten-Werck は大規模な Werk と考えられ、Großoctav, Gedackt, Gemshorn, Flute douce II²³ の 4 ストップが配置されている。アイゼナハの 8' の充実はヴェルクマイスターからさらに時代が進んだと考えられる配置である。

22 Böhme, Urlich., pp. 56-57

23 G. ジルバーマンは、このストップの 2 列のパイプは少し調律を狂わせて Schwebung の効果があるとしている。また 4 フィート・ストップだったとの説もある。

4' はヴェルクマイスターの典型的な3ストップ構成で、アイゼナハの Unter Seiten-Werck も同様である。アイゼナハの Ober Seiten-Werck は2ストップで、ミュールハウゼンと同様である。ミュールハウゼンは2ストップ Principal, Salicional で、Salicional 4' はヴェルクマイスター、アイゼナハにも見られないストップである。ヨハン・ゼバスティアンはこのストップは Oberwerk の Violdigamba 8' と「見事に調和する」と記している(資料1の8.)。Salicional 4' は彼の周辺、また北ドイツの楽器にも見られない特殊なストップである。Violdigamba 8' と「見事に調和する」とは何を意図しているのだろうか。ミュールハウゼンのオルガンには Rückpositiv と Oberwerk のカプラーは存在するとして、この2ストップをカプラーを使用して同時に鳴らすことは、現実的に考えられない²⁴。Violdigamba 8' と呼応する旋律を Salicional 4' で、1オクターヴ下で演奏することができるという意味と考えることが妥当ではないだろうか。トリオの作品などで、実際に演奏すると美しく響くことは明らかである。

ミュールハウゼンの Rückpositiv の Quintflöte はフィート数表示がないが、3' だとするとヴェルクマイスター、アイゼナハの楽器と同様、以前からあるものであるとしても Sesquialtera 用の3' と別にフルート族の3' を置いている。

リード管はミュールハウゼンには配置されていない。ヴェルクマイスターは Rück=positiv に Fagott 8', Schallmey 4', 4.Clavier に Vox human 8', アイゼナハは Ober Seiten-Werck に Vox humana 8', Unter Seiten-Werck に Regal 8' が配置されている。ヨハン・クリストフは Schallmey 4' を当初 Brustwerk に配置することを計画していた。Werk (鍵盤) は異なっても、配置されているパイプ(ストップ)は同じであることは興味深い。

ヴェルクマイスターの4.Clavier に記されているストップは、アイゼナハのオルガンにほとんどすべて存在している。ヨハン・クリストフは、明らかにヴェルクマイスターの提案を基に、アイゼナハの楽器の改修計画を立てているのではないだろうか。

4-1-4 Pedal

ヴェルクマイスター、アイゼナハ、ミュールハウゼンとも、閉管の32' を配置している。ミュールハウゼン規模の楽器に32' は異例であると感じるが、この時代大規模でない楽器にも32' が導入されている。1708-17年にヨハン・ゼバスティアンがオルガニストを務めたヴァイマル宮廷礼拝堂のオルガンは2段手鍵盤と足鍵盤の中規模な楽器であるが、32' が追加されている。この追加はヨハン・ゼバスティアン就任前のため彼の考えによる

24 G. ジルバーマンの記しているレジストレーションに、異なる手鍵盤の1ストップずつをカプラーをして組み合わせて使用する例が見られる。この例は本体部分に収納されているパイプの組み合わせである。Rückpositiv は本体部分と離れているため、ジルバーマンと同様のレジストレーションは考えにくい。

ものではない。その他のいくつかの楽器にも、規模と不釣り合いな 32' が配置されていることから、「荘重さ」を求める当時の流行りと考えられる。ミュールハウゼンのヨハン・ゼバスティアンの 32' 挿入と関連して、彼がハンブルク・聖カタリーナ教会の Principal 32' を高く評価をしていたことが引用される。しかしヴェルクマイスターはプリンシパルで 32' を製作することはコストを考えると無理をする意味はないとし、閉管の 32' を勧めている。ヨハン・ゼバスティアン、ヨハン・クリストフは当時の流行りの閉管の *Untersatz* 32' をここで配置したのではないだろうか。

3つの楽器に共通している 1' のパイプは特徴的である。通常 Pedal に 1' ストップは見られない。おそらく *Mixtur* と同様の効果を求めたと考えられる。その他 8', 4' のストップはプリンシパル族のストップが中心で、楽器によりフルート族のストップも挿入されている。

5. 考察

ヨハン・ゼバスティアンはオルガン鑑定家として各地でオルガン検査に招かれ、その検査は高い評価を得てきた。本論ではどのようにオルガン鑑定家としての技術を身に着けたのか、どのようなオルガンを理想としていたのか、ミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」から考察した。ヨハン・ゼバスティアンは中部ドイツの他、北ドイツのオルガンにも触れ、様々な楽器を知っていた。しかし彼のオルガンの理想は、北ドイツではなく 17 世紀末の新しい中部ドイツ・オルガン建造の変化に呼応していたことが、ヴェルクマイスター、ヨハン・クリストフ・バッハのオルガン改修計画との比較を通して、明らかにすることができた。

3台の楽器の特徴として、基音ストップの充実、低音パイプへのこだわりが挙げられる。なぜ基音ストップを多く配置することを考えたのだろうか。それまでのオルガン作品は合唱音楽の編曲から始まったコラル編曲と、トッカータ等の鍵盤楽器独自の形式による自由作品の 2つに分類され、他の器楽作品とは異なる音楽の歴史を歩んできた。しかし 17 世紀末より 18 世紀にかけて、ヴァイオリンなど他の楽器の音楽語法が、徐々にオルガン音楽にも取り入れられるようになる。コラル・トリオなどのようにトリオ・ソナタの語法によるもの、イタリアの協奏曲の模倣などである。特にイタリア協奏曲の *Tutti* (全員で演奏する部分) と *Solo* (独奏者による部分) の対比を、オルガンでは複数の鍵盤を使用することにより、音色・音量を変えて演奏する。*Tutti* 部分は複数のヴァイオリン奏者が同じメロディーをユニゾンで奏する。オルガンでは同じフィート数の基音ストップを複数使

用することにより Tutti の音色を表現する。そのためヨハン・クリストフは基音ストップの充実を、新しいオルガンに求めたのではないだろうか。これまでのオルガンの輝かしくシャープな音色から、重厚な音色、つまり「荘重さ」が求められるようになったのである。また Rückpositiv のようなオルガン特有の響きを避け、Rückpositiv の廃止、Rückpositiv と Oberwerk のカプラーの設定も、「荘重さ」を求めた結果と考えられる。

20 世紀のバッハ研究の中で、楽器としてのオルガンは、ドイツ・オルガン運動の影響、そして北ドイツのオルガン研究の先行により、ヨハン・ゼバスティアンの北ドイツの楽器からの影響を過大に評価する傾向があったのは事実である。音楽の分野でもアルンシュタット時代にリュウベックを訪ね、ブクステフーデの音楽に触れた結果、バッハの音楽は大きく変化したといわれてきた。しかし近年の研究により、ヨハン・ゼバスティアンはすでにオールドルーフ時代、ブクステフーデの作品を知っていたことは、現在では周知の事実である。そして中部ドイツのパッヘルベルなど同地域の音楽家の影響が指摘されている。楽器の分野でも同様に、彼の生まれたアイゼナハなど中部ドイツのオルガン、そして新しい時代の音色である「荘重さ」に注目し、その音色を追い求めてミュールハウゼンの「オルガン改修計画書」を作成したと考えられる。実際書かれている内容は中部ドイツ地域の新しい時代のオルガン建造に基づくものである。

バッハがこの計画書を記したのは 1708 年である。バッハのオルガン観が、この後、どのように、変化していったのか今後さらに研究を続けていきたい。

資料1 聖ブラージュウス教会・新しいオルガンの改修に関する仕様

1. 不足する風は、3つの新しい能力のあるふいごによって補わなければならないが、それは Oberwerck, Rückpositive, そして新しい Brustwercke に十分な風を送る。
2. 古い4つのふいごは、より強力な風圧で新しい Untersatz 32', その他の低音部のために使用されなければならない。
3. 古い低音用の風箱はすべて取り外し、新しい風導管を取り付けなくてはならない。それは1ストップ単独でも全ストップでも風を変更せずに使用が可能である。今までこのような形で行われたことがないが、高い必要性がある。
4. 次に32フィートの Sub Bass いわゆる木製の Untersatz は、オルガン全体に最上の荘重さを与える。このストップのパイプのために、固有の風箱を用意しなければならない。
5. Posaunen Bass は新しく大きなボディとしなければならず、そしてシャロットを大幅に調整することにより、より荘重さをこのパイプから響かせなければならない。
6. 教区の人々が望んでいるペダル用の新しい Glockenspiel (チャイム) は4フィート音高で26の鐘からなる。これらの鐘は教区の人々が自費で購入すれば、オルガン製作者が使用できるよう取り付けの予定である。
7. Oberwerck に関しては Trompette (ここから撤去される) の代わりに、Fagotto 16' が取り入れられ、これは新しいあらゆる工夫に有効で、また音楽(合奏)の中で非常にデリケートに響く。さらに Gemshorn (これも除去) の代わりに、
8. VioldiGamba 8' が置かれ、これは Rückpositiv の Salicional 4' と見事に調和する。Quinta 3' (これも除去される) の代わりに
9. Nassat 3' を置くことができるだろう。Oberwerck の残りのストップは、Rückpositiv 全体と同様にそのまま使用することができるが、改修の際、新たに調律されなければならない。
10. 新しい Brustwerck に関しては、以下のストップを置くことが可能である。

前面に3つのプリンシパル管、特に

- | | | |
|--|---|------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. Quinta. 3' 2. Octava. 2' 3. Schalemoy 8' 4. Mixtur. 3fach | <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; height: 40px; width: 20px; margin: 0 auto;"></div> | <p>14 ロート (87.5%) の上質の錫製</p> |
| <ol style="list-style-type: none"> 5. Tertia いくつかの他のストップを加えることにより、完全に美しい Sesquialtera の響きを実現することができる。 6. Fleute douce. 4' そして最後に 7. Stillgedackt. 8' これはアンサンブルを完璧に伴奏するもので、良質の木材で製作するならば、金属製の Gedackt よりもはるかに良く響く。 | | |

11. Brustwerck と Oberwerck の手鍵盤はカプラーがなければならない。そして最後に、すべてのヴェルクが調律された際に、Tremulant は正しい速度で拍動するように調整しなければならない。

出典：BACH-DOKUMENTE Band I, pp. 152-153

資料2 「各オルガンのディスポジション」

	ヴェルクマイスター	アイゼナハ	ミュールハウゼン
	II. Ober=werk	III. Oberwerck C-e³	II. Ober- und Hauptwerk C, D-d³
1	Principal 16'	-	-
2	Qvintiten 16'	Bordun 16'	Quintatön 16'
3	Octava 8'	Principal 8' (錫, 前面管)	Principal 8'
4	Spitzflöit 8'	Rohrflöte 8'	-
5	Gedackt (広いスケール) 8'	-	-
6	Violdigamba 8'	Violdigamba 8'	Violdigamba 8'
7	Qvinta 6'	Qvinta 6'	-
8	Super Octav 4'	Octav 4'	Oktave 4'
9	-	Flöte 4'	Gedackt 4'
10	Qvinta 3'	Nassat 3'	Quinte 3' (Nassat 3' を提案)
11	Klein Octav 2'	Superoctav 2'	Oktave 2'
12	Tertia 1 ⅔'	-	-
13	-	Sesquialtera III	Sesquialtera 2fach
14	Mixtur 6.fach 1'	Mixtur VI	Mixtur 4fach
15	-	Cimbel III	Cymbel 2fach
16	Fagott 16'	-	Fagott 16' von C bis c ¹
17	Trompet 8'	Trompete 8'	-
	I. Rück=positiv	II. Ober Seiten-Werck C-e³	I. Rückpositiv C, D-d³
1	-	Quintathön 16'	-
2	Principal 8'	Großoctav 8'	-
3	-	Gedackt 8'	Gedackt 8'
4	Qvintiten 8'	Gemshorn 8'	Quintatön 8'
5	-	Flute douce II (楓の木)	-
6	Octava 4'	Principal 4' (錫, 前面管)	Principal 4'
7	Nacht=horn (開管) 4'	Hohflöth 4'	-
8	Spitzflöit 4'	-	-
9	-	-	Salicional 4'
10	Qvinta 3'	-	-
11	Gedackte Qvinta 3'	Hohflöt 3'	Quintflöte (フィート数表示なし)
12	Super Octav 2'	Octav 2'	Oktave 2'
13	-	Blockflöte 2'	Spitzflöte 2'
14	Tertia 1 ⅔'	-	-
15	-	Sesquialtera III	Sesquialtera (列数表記なし)
16	Mixtur 4fach 1'	Scharff IV	Cymbel 3fach
17	Fagott 8'	Vox humana 8'	-
18	Schallmey 4'	-	-
	III. Brustwerk	I. Brustwerck C-e³	III. Brustwerk C, D-d³
1	Gelind Gedackt (狭いスケール) 8'	Grob Gedackt 8'	Stillgedackt 8'
2	Qvinta thon 8'	-	-

J.S. バッハのオルガン観

	ヴェルクマイスター	アイゼナハ	ミュールハウゼン
3	Principal 4'	-	-
4	Klein Gedackt 4'	Klein Gedackt 4'	Flöte 4'
5	Qvinta thon 4'	-	-
6	Qvinta 3'	-	Quinte 3' (Adlung は 1½' と表記)
7	Octav 2'	Principal 2' (錫, 前面管)	Principal 2'
8	Spitzfloit 2'	Super Gemshörnlein 2' + Quinta 1½'	
9	Tertia 1 ⅓'	Quint 1½' + Sexta ⅔'	Terz 1 ⅓'
10	Mixtur 3fach	-	Mixtur III
11	Feldfloit 1'	Sifflöte 1'	-
12	Lieblich Regal 8'	-	Schallmey 8'
	(IV. 4.Clavier)	IV. Unter Seiten-Werck C-e³	-
1	-	Barem 16'	-
2	(Gelind Gedackt 8')	Still Gedackt 8'	-
3	-	Quintathön 8'	-
4	-	Principal 4'	-
5	-	Nachthorn 4' (2 列)	-
6	(Klein Gedackt 4')	Spitzflöt 4'	-
7	(Nasat 3')	Spitzquint 3'	-
8	(Siffloit 2')	Octav 2'	-
9	(Klein Gedackt 2')	Schweitzerflöth 2'	-
10	-	Super Octävlein 1'	-
11	-	Rauschquinte 1½'	-
12	(Mixtur 3fach)	Cimbel VI	-
13	(Vox human 8')	Regal 8'	-
	Pedal	Pedal C-e¹	Baßlade C, D-d¹
1	Groß=Untersatz 32'	Großer Untersatz 32'	Unttersatz 32'
2	Principal 16'	Principal 16' (錫, 前面管)	Principal 16'
3	-	Violon 16' (金属製)	-
4	Subbass 16'	Subbaß 16'	Subbaß 16'
5	Octava 8'	Octav 8'	Oktave 8'
6	Gedackt 8'	Gedackt 8'	-
7	Super Octava 4'	Super Octav 4'	Octave 4'
8	-	Flöte 4'	-
9	Kleine Octava 2'	-	-
10	Wald floit Baß 1'	Bauernflöte 1' (2 列)	Rohrflötenbaß 1'
11	Mixtur 4fach 1'	Mixtur VI	Mixtur 4fach
12	Posaun 16'	Posaun Baß 16'	Posaune 16'
13	Trompet 8'	Trompete 8'	Trompete 8'
14	Cornet 2'	Cornet 2'	Cornetbaß 2'
15	-	Glockenspiel 2'	Glockenspiel 4' (未設置)